

般 若 寺 跡

大宰府史跡 昭和54年度発掘調査概報別冊

昭和55年3月

九州歴史資料館

般 若 寺 跡

大宰府史跡 昭和54年度発掘調査概報別冊

昭和55年3月

九州歴史資料館

例 言

1. 本書は九州歴史資料館が昭和54年4月3日～24日に実施した福岡県筑紫郡太宰府町大字南字般若寺所在の般若寺跡の発掘調査報告書である。
2. 発掘調査は住宅建築にともなう事前の緊急調査で、調査の実施にあたっては九州歴史資料館調査課高倉洋彰、高橋章が担当し、調査補助員として山本信夫（現太宰府町教育委員会）が参加した。調査の実際には調査課技術主査石松好雄、倉住靖彦、横田賢次郎、森田勉各氏のご協力を得た。
3. 検出遺構ならびに般若寺跡周辺の旧状について、北九州市立歴史博物館主幹小田富士雄氏のご指導を得た。
4. 発掘調査の基準点は国土調査法の第Ⅱ座標系の数値を用い、実測図を作成した。
5. 遺構・遺物の実測・製図は高倉・高橋・山本が行なった。遺構・遺物の写真撮影は学芸一課石丸洋による。また遺物の整理・復原には井上トシ子、松浦敏子、田崎道子の協力を得た。
6. 本書の執筆・編集は高倉・高橋が行なった。

目 次

I 調査にいたる経過	1
II 歴史的環境	3
III 調査の概要	4
IV 遺 構	6
V 遺 物	8
(1) Aトレンチ出土土器	8
(2) S B001 (B・Cトレンチ) 出土土器	10
(3) 瓦 類	11
VI 般若寺をめぐる諸問題	18
(1) 調査の成果	18
(2) 般若寺出土の瓦	19
(3) 「上宮聖徳法王帝説」裏書にみえる般若寺との関係	20
(4) ま と め	22
註	23

挿 図 目 次

第1図	『太宰府旧蹟全図北図』に記された般若寺跡	1
第2図	般若寺跡周辺古代寺院分布図	2
第3図	トレンチ配置図	4
第4図	Aトレンチ遺構実測図	5
第5図	B・Cトレンチ遺構実測図	折込み
第6図	Bトレンチ南壁および SB 001 基壇層位図	7
第7図	塔心礎実測図	7
第8図	Aトレンチ出土土器実測図	8
第9図	SB 001 基壇外出土土器実測図	9
第10図	軒丸瓦拓影・実測図 (I)	13
第11図	〃 (II)	14
第12図	〃 (III)	15
第13図	軒平瓦拓影・実測図 (I)	15
第14図	〃 (II)	16
第15図	丸・平瓦拓影	17
第16図	般若寺跡周辺の遺構分布図	18

図 版 目 次

図版 1	般若寺跡周辺航空写真
図版 2	般若寺塔跡周辺近景
図版 3	塔 心 礎
図版 4	調査地点の現状
図版 5	(上) Aトレンチ (北から) (下) Dトレンチ (西から)
図版 6	SB 001 瓦積み基壇と基壇外の遺物出土状態
図版 7	(上) 瓦積み基壇外の遺物出土状態 (西から) (下) 軒先瓦の出土状態
図版 8	(上) SB 001 瓦積み基壇西北隅の状態 (下) SB 001 瓦積み基壇近景 (西北から)

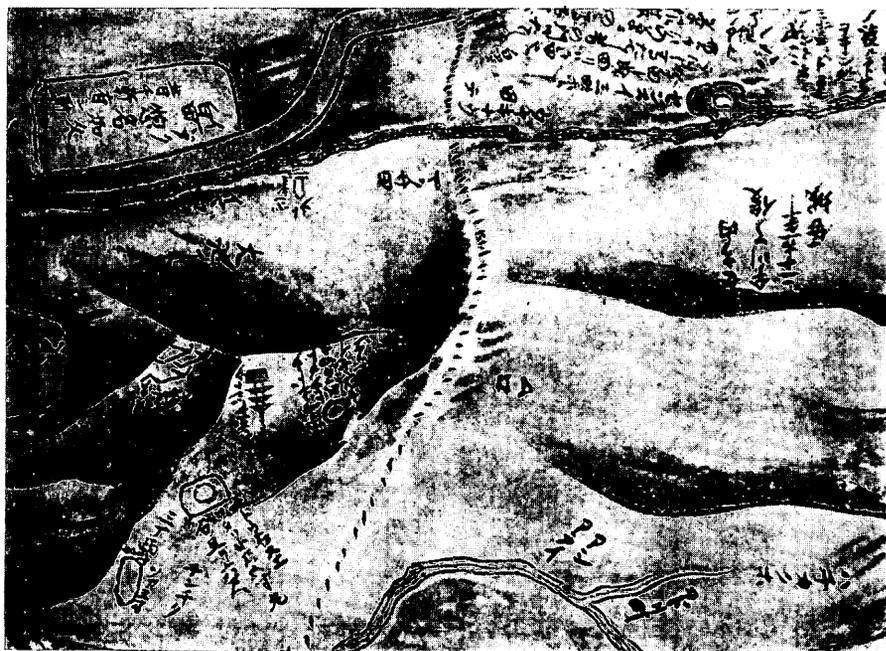
- 図版 9 SB 001 基壇化粧の状態
- 図版10 SB 001 の基壇と塔心礎
- 図版11 (上) C地点出土の礎石
(下) F地点出土の礎石
- 図版12 般若寺跡出土土器
- 図版13 般若寺跡出土軒丸瓦
- 図版14 般若寺跡出土軒丸・軒平瓦

I 調査にいたる経過

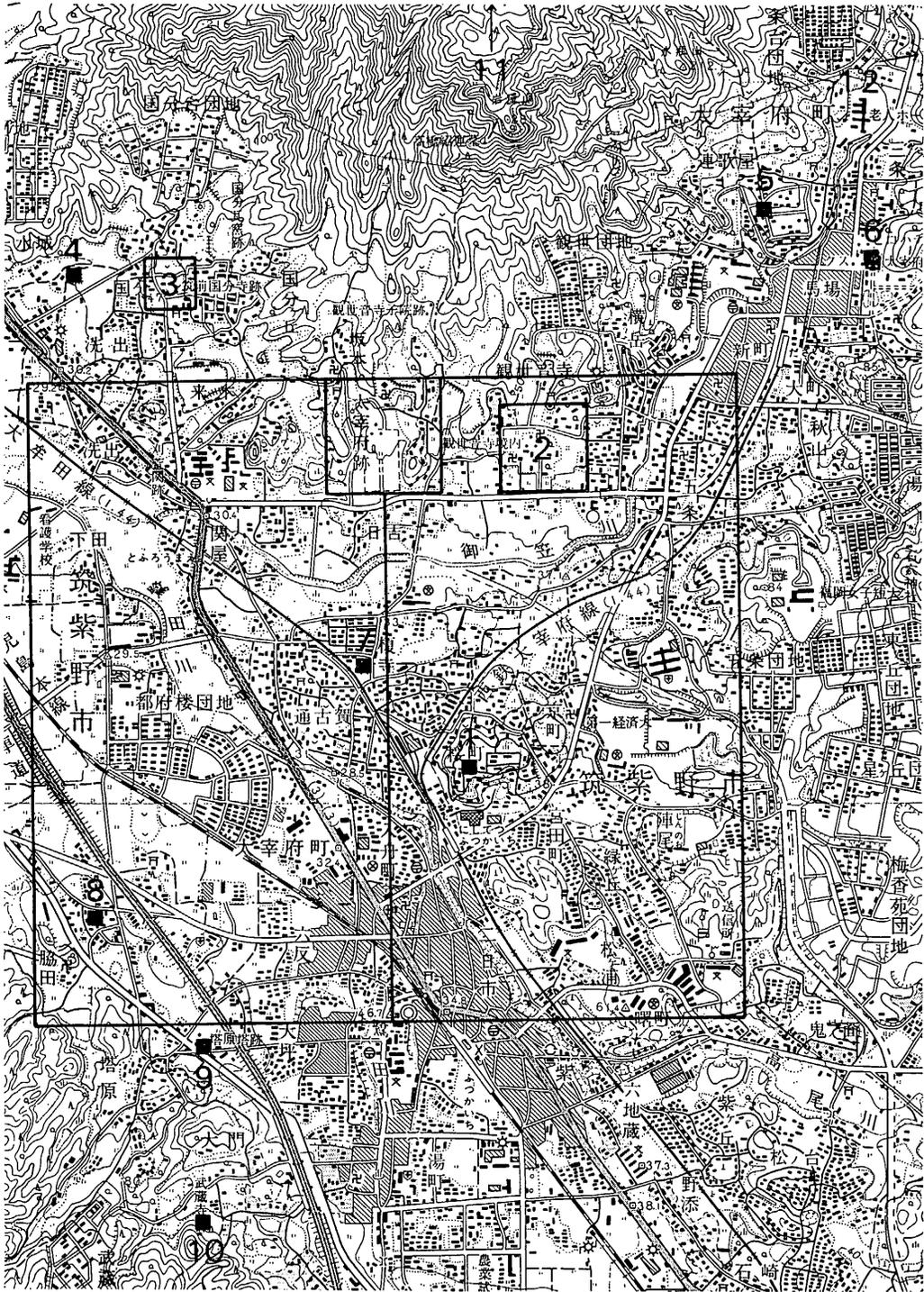
西鉄大牟田線二日市駅のすぐ東側の低丘陵の上部は、北に大宰府政庁・観世音寺をのぞみ、また条坊の全体を一望する好適の地である。大宰府条坊左郭14条4坊に相当するこの丘陵上に、塔心礎1個を残す寺跡が存在している。周囲に奈良時代頃の瓦が堆積・散布しており、ほとんど宅地化されなかった20数年前には土壇も残っていた(図版2)。この一帯(筑紫郡太宰府町および筑紫野市)の地名を般若寺と称することから、般若寺跡として古くから知られている(第1図)。また塔心礎の東約100mの地点に鎌倉時代の重要文化財石造七重塔一基があり、般若寺跡地に建立されたものと言われている。

般若寺塔心礎の所在地の西隣り、太宰府町大字南字般若寺9-32番地に住宅建築の申請が昭和54年4月に提出された。般若寺々域と推定されつつもこの丘陵上は、未指定・未調査のままに宅地化され、すでにまとまった空間はほとんどみられなくなっている。報告していくように、般若寺は大宰府の古代寺院の一つとして様々の問題を含んでいる。そこで、般若寺を解明する手懸りを得る必要上、建築申請を受けて発掘調査を実施することとした。

調査には昭和54年4月3日から24日までの3週間を要した。昭和51年に七重塔の解体修理にともない、周辺の調査を実施しているので、本年度の調査を第2次調査としている。



第1図 『太宰府旧蹟全図北図』に記された般若寺跡



1. 般若寺 2. 観世音寺 3. 国分寺 4. 国分尼寺 5. 原山無量寺 6. 安楽寺
 7. 淨妙寺(禊寺) 8. 杉塚麿寺 9. 塔原麿寺 10. 武蔵寺 11. 四王寺 12. 龍門山寺(大山寺、有智山寺)

第2図 般若寺跡周辺古代寺院分布図

II 歴史的環境

大宰府は古代の九州における政治的中心であったとともに、宗教的にも中心を占めており、古代寺院の数も多い。それらは第2図に示したように条坊の北辺、中央、西南隅の三グループに大別される。

北辺グループの中心をなすのは、九州の古代の僧綱を統轄した観世音寺である。観世音寺は天智天皇が母帝斉明天皇の菩提をとむらうために発願され、80余年の歳月をかけ天平18年(746)に完成している^(註1)。観世音寺の完成した8世紀の中頃には条坊北辺郭外に筑前国分寺・筑前国分尼寺^(註2)、あるいは北東隅から東へ約2kmの宝満山麓に竈門山寺(大山寺・有智山寺)^(註3)が相次いで創建されている。次いで宝亀5年(774)に四王寺(四王院)が新羅からの宗教的な呪咀の壊却を目的として大野城中に創建された^(註4)。平安時代にはいと天安2年(858)に四王寺別院として智証大師円珍の弟子華台坊によって大野山麓に原山無量寺が、さらに延喜5年以降の延喜年中(905~922)には菅原道真の霊をとむらうため味酒安行によって条坊の北東隅郭外に安楽寺がそれぞれ建立されている^(註5)。こうして安楽寺を最後として10世紀初頭、今日知られている北辺の諸寺が豊を競うにいたる^(註6)。

ところで条坊北辺には観世音寺を別格とするにしても筑前国分寺・尼寺、四王寺、竈門山寺といった九州における有力寺院が並立しているが、それらは観世音寺を除いていずれも郭外に占地にするという十分に注目しうる事実があり、留意しておきたい^(註7)。

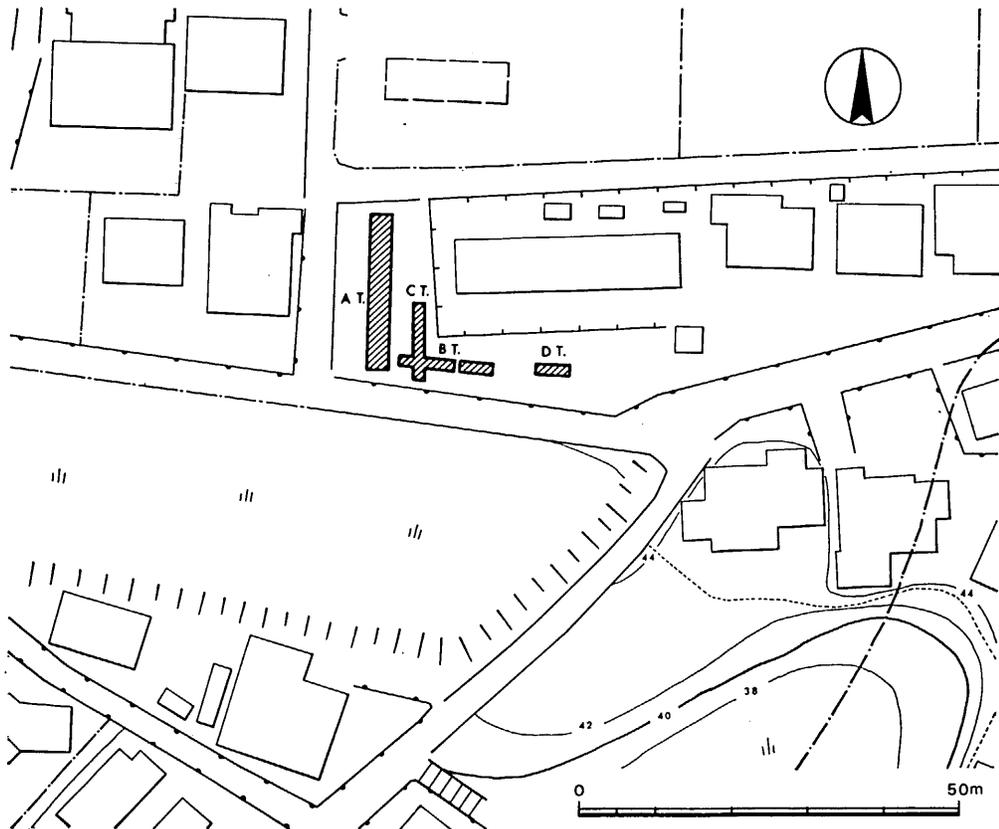
中央部分のグループとしては後に詳述する般若寺と浄妙寺とを挙げることができる。浄妙寺は榎寺とも別称し、悲運のうちに府の南館に薨じた道真の遺跡に大宰大貳藤原惟憲が治安3年(1023)ないしは万寿2年(1025)に創建したと伝えられている^(註8)。

西南隅のグループには塔原廃寺、杉塚廃寺、武蔵寺が知られている。塔原廃寺は今日では塔心礎を残すのみであるが、出土遺物などから7世紀後半に建立され8世紀初めをあまり下らない時期に廃絶したであろうと考えられている^(註9)。杉塚廃寺は昭和48・54年に発掘調査されておりその結果と既知の出土資料などから、7世紀後半に建立され8世紀を経て一部9世紀におよぶ時期の寺と考えられる^(註10)。11世紀代には「むさしてら」「湯寺」「温泉道場」などの名で都にもその名を知られた武蔵寺はその創建年代を明らかにしえないが、先の塔原廃寺の後身とする見解もある^(註11)。これら西南隅のグループの諸寺には塔原廃寺、杉塚廃寺、といった創建が奈良時代以前にさかのぼる寺が含まれており、大宰府における寺院形成を考える上で興味ある問題を提起している^(註12)。

Ⅲ 調査の概要

調査対象地は塔心礎所在地西側の宅地約 300m² で、丘陵頂部平坦地の南端に相当する。この地域にはかつて土壇が残されていた(図版 2) が、丘陵上を宅地化する際に削平されており、遺構の遺存にそれほど期待をもてるものではなかった。

調査は昭和54年 4 月 3 日に着手した。調査対象地の中央に幅 3 m × 長さ 21 m の A トレンチを南北方向に設定し、発掘を開始した。しかし A トレンチでは顕著な遺構を認めることはできなかった。ついで近年現在の位置に据え直された塔心礎の原位置の確認を目的として、心礎の東西に幅 1.5 m × 長さ 12.5 m の B トレンチを設定し発掘したところ、瓦積み基壇の一部を検出することができた。そこで瓦積み基壇の規模を知るために、南北方向に幅 1.5 m × 長さ 10 m の C トレンチを設定し、基壇の西辺・北辺を確認することができた。次に東辺の位置の確認をはかったが、B トレンチの東には農林漁業金融公庫二日市職員社宅の便槽が設けられていたため、



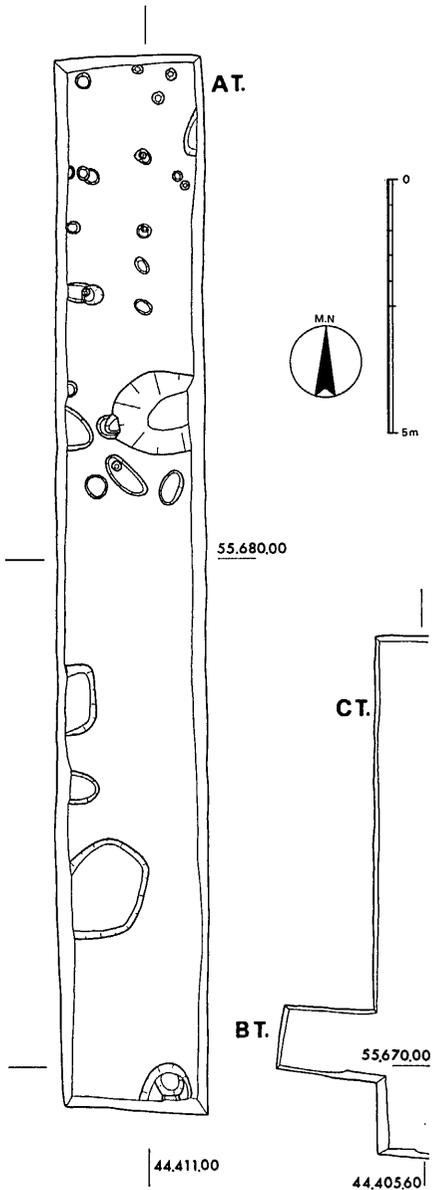
第3図 般若寺跡トレンチ配置図

さらにその東に幅1.5m×長さ4.5mのDトレンチを東西方向に設定した。しかしDトレンチには基壇積土は延びておらず、またその他の遺構も確認できなかった。なお調査区の南はすでに道路として削平されており、結局B・Cトレンチで検出した基壇はその北辺・西辺の二辺を確認したにとどまった。こうして遺構の写真撮影・実測を終え、原状に埋め戻し4月24日に調査を終了した。

Aトレンチ（第4図、図版5-上） 現地地表下約30～70cmで、約10～20cmほどの厚さの旧表土層が認められ、その直下に約20～60cmの厚さの茶灰色土層が堆積していた。いずれもゆるやかに南へ傾斜していた。茶灰土層中には瓦や土師器・須恵器片が多く含まれている。茶灰土層下は地山面をなし、やはり南へと傾斜していた。検出した土坑・ピットは地山面に掘り込まれていた。出土遺物の流れからトレンチの北側に瓦葺建物の所在した可能性をうかがいうる。

B・Cトレンチ（第5図、図版6～10） Aトレンチ同様に昭和30年代の宅地造成時に堆積された攪乱土層が旧表土を全体に覆っていた。塔心礎はこの攪乱土層の上に据えられており、原位置を保たないことは明らかであるが、原位置を知る手懸りはえられなかった。旧表土層下はSB 001の基壇積土が5～10cmほどの厚さで互層をなしながら版築状に地山面から積まれていた（第6図）。基壇については後に詳述するが、その他の遺構は全く認められなかった。

Dトレンチ（図版5-下） A～Cトレンチとは異なり、旧表土層下には若干の瓦を含む暗茶灰色土層が約20cmほどの厚さで堆積し、さらにその下層に厚く濁茶色土層が続いていた。しかしSB 001の基壇掘込み地業と同一レベル面にいたっても遺構は全く検出されなかった。遺物の出土もきわめて少ない。



第4図 Aトレンチ遺構実測図

IV 遺 構

礎石建物（塔跡）（第5図、図版6～10）

SB 001 B・Cトレンチにおいて瓦積み基壇の一部を検出した。すでに基底近くまで削平されており、礎石等は掘方を含めて残存しなかった。西辺ではその北端から8.1mまで基壇幅を確認したがさらに南に延びる。基壇化粧の瓦積み部は削平のため基壇からの一・二段を残すのみであったが、北側の一部に補修を受けた個所があり、その部分では九段まで残存していた。基壇積土の一部を掘り下げ、瓦を一行に積み上げた後に暗灰茶色土を充填している。北端から南へ約3.8mの個所には石が置かれていたが、その意味するところを明らかにできなかった。また、トレンチ南端近くの基壇外には瓦に混じって20cmほどの大きさの石が多く散乱し、一部列をなしていた。階段等の施設の一部をなす可能性を考え精査したが、確認には至らなかった。なお基壇の造成にあたって掘込み地業を行なっている。地業は瓦積みの線の約1.1m外側から行なわれ、瓦積みの基底から約0.4mの深さまで掘込まれていた。

北辺ではその西端から0.7mまで基壇幅を確認したが、それより東は農林漁業金融公庫二日市職員社宅を囲むブロック塀のため調査は不可能であった。西辺同様やはり残存状態は良くない。

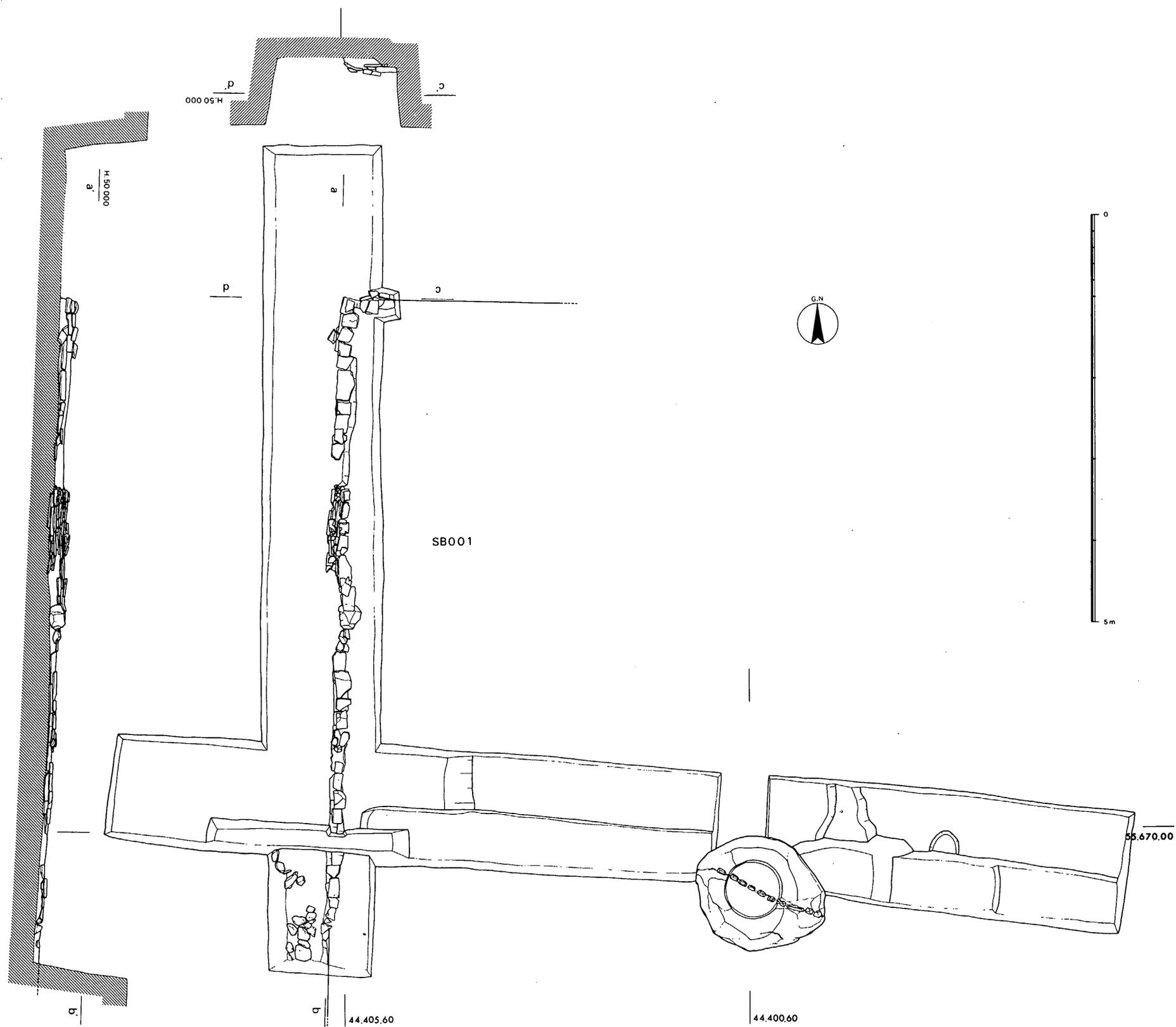
このようにSB 001はその西北隅および西辺・北辺の一部を確認したにとどまる。しかしDトレンチには基壇は延びておらず、その結果、SB 001の東西の基壇幅が15mを越えるとは考えられない。さらに基壇外には多量の瓦と少量の須恵器・土師器が約1mの幅で散乱していた。このような基壇外の様相もDトレンチではみられず、したがって基壇幅はさらに短くなり最大に考えても14m以下となる。

こうしてSB 001の基壇規模は東西約14m以下、南北8.1m以上であり、政庁中軸線に対してN1.5°Eに方位をとることが知られる。

ところで、SB 001の基壇の直上には移動後のものであるが塔心礎が据えられている（第7図、図版3）。旧位置についての人々の記憶や写真などを参考にすれば、どうやらかつては現在の位置より約3m南側の道路沿いの崖面際に傾斜した状態で所在していたと考えられる。したがって原位置をとどめないとはいえ、心礎の移動はSB 001を離れてはいないと思われる。

塔心礎は径約180cm、厚さ約80cmほどの大きさの花崗岩を加工しており、後世箭が入れられるなど一部に破損・風化がみられる。表面は平坦に仕上げられており、その中心に直径上端73.0cm、下端69.2cm、深さ15.0cmの心柱円形柄穴が彫込まれている。石田茂作氏の分類に従えば、第四類（一段式）Aに相当する。^(註13)

先述した西辺基壇外の小石を階段の一部とみなせばSB 001は南北方向に長軸をとる可能性



第5図 般若寺跡B・Cトレンチ遺構実測図(1/60大)

V 遺 物

本調査での出土遺物は土師器・須恵器および多量の瓦類である。

(1) Aトレンチ出土土器 (第8図、図版12)

Aトレンチでは北から南へ傾斜する遺構面を30~60cmほどの厚さの茶色土層が覆っていたが、その層中に多量の瓦類および須恵器・土師器が包含されていた。多くは小破片である。

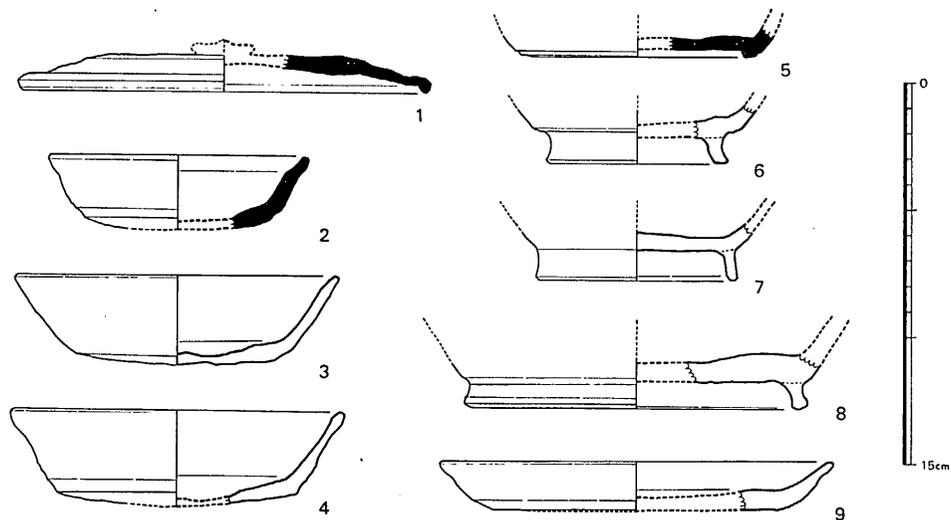
須恵器

杯蓋(1) 口径16.0cmほどに復原される杯蓋で、天井部はヘラ削りされるが、他はナデで調整されている。口縁端部は、体部をわずかにつまみ出し、断面三角状をなしている。

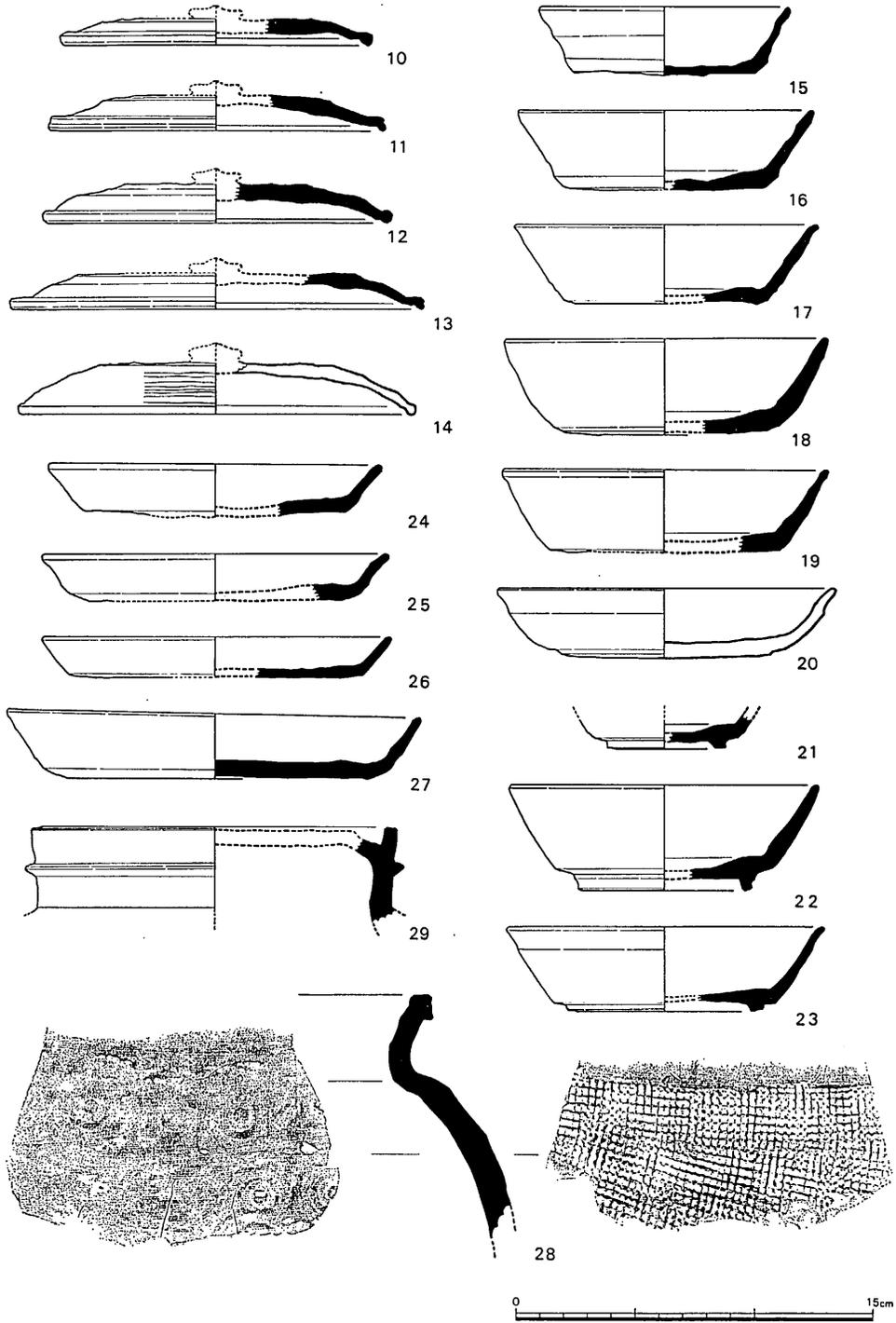
杯身(2・5) 2は無高台の杯身で、口径10.1cm、器高2.9cmほどに復原される小形品である。ヘラ切りされた外底の一部にヘラ削りがみられるが、全体にナデで仕上げている。5はヘラ切りされた底部の外端に断面四角形のきわめて低い高台を有する杯身で、部分的に高台は体部と一体をなす。

土師器

杯(3・4・6~8) 3・4は高台を有さない杯で、ヘラ切り離された底部からわずかに内湾気味の体部が立ち上がる。体部・内底をナデで調整している。胎土には砂粒を多く含む。硬質に焼成され、赤褐色を呈する。3はほぼ完形で、口径12.5cm、器高3.5cm、底径7.6cmを測る。体部内面の一部にスス状の付着物がみられる。4は口径12.9cm、底径9.2cm



第8図 Aトレンチ出土土器実測図



第9图 SB001 基坛外出土土器实测图

ほどに復原され、器高約3.7cmをはかる。6～8は高台を有する杯身で、いずれもヘラ切り離しされた底部の外端に付けられている。

皿(9) 砂粒を多く含む胎土を軟質に焼成した皿で、口径15.3cm、底径10.9cmほどに復原され、器高2.0cmをはかる。淡い赤褐色を呈する。

(2) SB001 基壇外(B・Cトレンチ)出土土器(第9図、図版12)

B・Cトレンチでは多量の瓦類および須恵器・土師器が検出された。中でもSB001の基壇外には約1mほどの幅で帯状に瓦が散乱し(図版7)、それらに混在して須恵器および少量の土師器が出土している。ここでは基壇外の淡茶色土層中から検出された土器について述べる。

須恵器

杯蓋(10～13) いずれも小破片で、口径13.0～17.3cmほどに復原される。天井部外面をヘラ削りしているが、他の部分はナデで調整をほどこしている。堅緻に焼成されるが、13は生焼けのものである。天井部と体部との境はそれほど明瞭な稜をなさない。体部から口縁部に向うにしたがい大きく屈曲して外に開く。口縁体部は体部をわずかにつまみ出し、内面に浅い凹線をつけることによって断面三角状につくられている。12からつまみを有していたと推定される。

杯身(15～19・21～23) 15～19は無高台の杯身で、口径10.6～13.6cm、底径7.6～9.5cmほどに復原される。器高2.9～4.0cm。ヘラ切り離された底部から直線的に体部は立ち上がるが、18はやや内湾気味である。体部の下端をヘラ削りするものが多く、また体部・内底をナデで調整し仕上げている。他器種を通じて小破片が多いが、15のみは完形である。21～23は断面四角形の高台を有する杯身の例である。21が底径4.9cmに復原される小形の高台杯に対し、22・23は口径12.8・13.2cm、高台径7.2・8.1cm、器高4.4・3.5cmをはかる。高台はいずれも底部外端よりもやや内側に付けられる。全体にていねいなナデ調整がほどこされている。22の内側は墨が付着している。

皿(24～27) 体部・内底を横ナデないしナデで仕上げ、外底はヘラで切り離しておりかるくナデで再調整している。いずれもシャープにつくられている。24～26は口径14.0～14.6cm、底径10.4～12.3cmに復原され、器高1.7～2.2cmをはかる。27は口径17.2cm、底径12.5cm、器高2.6cmをはかり、他例にくらべて大形である。体部の立ち上がりも内湾気味で、全体に丸味をもっている。

甕(28) 大形の甕の口縁部から肩部にかけての破片である。短かく立ち上がる口縁の端部は上下外面を直線的に切り、内面にかかる凹線をめぐらすことによって「コ」字状につくられている。口縁部の全体をていねいな横ナデで調整している。肩部外面にはていねいな正格子のタタキがみられる。内面の同心円文のタタキも同様にていねいで、並列状にあまり重複しない

ように注意しつつタタいており、さらにその上からナデ消している。法量不明。

硯 (29) 口径 15.4cm ほどに復原される円面硯の一部で、海部の外縁を残すのみである。

土師器

杯蓋 (14) 口径 16.6cm ほどに復原される杯蓋で、残存部の中心につまみの一部が残されており、つまみを有していたことがしられる。天井部をヘラ削りした後外表面の全体をていねいにヘラみがきしている。天井部と体部との境はそれほど明瞭ではない。口縁端部のやや内側に内外ともに浅い凹線をめぐらし、断面三角形状の口縁端をつくり出している。口縁端部に屈曲はみられない。内面は磨滅しているが、一部にナデが認められる。微砂の混じる精良な胎土を硬質に焼成しており、赤褐色を呈する。

杯身 (20) 口径 14.1cm、底径 5.7cm、器高 3.0cm ほどの大きさに復原される杯身で、暗赤褐色を呈する。軟質の焼成のためか器表の磨滅がいちじるしい。胎土には砂粒を若干含んでいる。ヘラ切り離された底部から立ち上がる体部はゆるやかに内湾しており、口縁端部付近でかるく外反するが、全体に丸味が強い。

(3) 瓦類

今回の調査で出土した瓦類は、軒丸瓦、軒平瓦、道具瓦と丸・平瓦である。これらは主に塔跡 (SB001) 基壇両側の淡茶色土から出土した。また、般若寺跡出土とされている採集品の瓦があるため、ここでは、それと合せて述べることにする。

軒丸瓦 (第10~12図、図版13・14)

今回の調査で総数15点が出土し5種に分類できる。1は老司I式と呼ばれており、本跡出土のなかでは量的に多く、最も古期の瓦である。2は老司式の系統を引くもので、中房の蓮子は1+6+10で、1に比べ中の蓮子が1個多くなっている。蓮弁は短く、子葉は円形に近い。類例は大宰府跡、杉塚廃寺などで発見されている。3は老司系に属するものと思われるが、中房蓮子は1+8に減じており、蓮弁の周囲と間弁が接続して単弁化している。類例は大宰府跡、杉塚廃寺、三宅廃寺などで発見されている。4はいわゆる鴻臚館式と呼ばれているもので、中房と蓮弁がほぼ同一面におかれているため全体に平坦な瓦当面になっている。大宰府跡で出土している。5は今回の調査で出土したもので、中房蓮子は1+8+13と密に配し、蓮弁は複弁八弁+単弁一弁から成っている。瓦当裏面は指ナデにより丁寧に調整し、顎部は2cm程高い縁を囲らし、丸瓦と接続する。6は小片で全容を明らかにし得ないが、中山平次郎が「古瓦類雑考」に紹介しているものによると、中房蓮子は1+5+10で、周囲に蕊を配し蓮弁は複弁六弁であろう。類例は大宰府南条坊遺跡から出土している。7は弁が菊花様になる細弁で、配列は整然としない。瓦当面は、平坦に近く、外縁の立上りは1.3cmある。大宰府跡、筑前国分寺などで発見されている。8は7よりやや幅広の単弁である。胎土に砂粒が多く含まれてい

る。この瓦は大宰府政庁跡（西脇殿）から比較的多く出土している。9は瓦当面が平坦で木範の痕跡が顕著に認められる。瓦当裏面は横方向に調整している。類例は大宰府南条坊遺跡、鴻臚館跡で発見されている。10・11は小片で全容は明らかでない。しかし中房は共に類似しており、弁幅が若干異り11がやや幅広いものである。

軒平瓦（第13・14図、図版14）

発掘調査では総数18点出土し、4種に分類できる。

1は老司Ⅰ式と呼ばれているもので、右から左に流れる扁行唐草文である。凹凸面共に丁寧にナデ調整している。2は老司Ⅱ式で、Ⅰ式に比較して蔓草の巻が浅く、流れがシャープになる。珠文もⅠ式に比べて小さい。1・2共に出土量は最も多い。3は老司系に属するものと思われる。2に比べ珠文凸鋸歯文を密においており、蔓草は1単位が3個から成っている。顎は段顎で、ヘラ切りの際、誤って切り落とした痕が認められる。4は蔓草を簡略した曲線的な文様に変化している。凸鋸歯文は内向し、全体に粗雑な作りである。段顎に縄目の叩きが残っている。類例は大宰府跡で発見されている。5はいわゆる鴻臚館式と呼ばれているもので、中心飾から左右に4回反転する均正唐草文である。この瓦は全体に黒色に焼成されているのが特徴で、類例は大宰府政庁跡で発見されている。6は蔓草を内側に深く巻き込んだC字形の中心飾から、左右に3回反転する均正唐草文である。上・下・脇区は珠文を配し、顎はやや段顎の感を残した曲線顎で、ナデによって調整している。類例は大宰府第64次調査、平安宮などから発見されている。7は扁行唐草文と思われる。瓦当面は平坦になっており、顎は浅い段顎である。類例は大宰府跡で出土している。

鬼瓦

Aトレンチの茶色土（瓦層）から鬼瓦の鼻部の破片1点が出土した。大宰府政庁跡から出土するものと若干異ったものである。

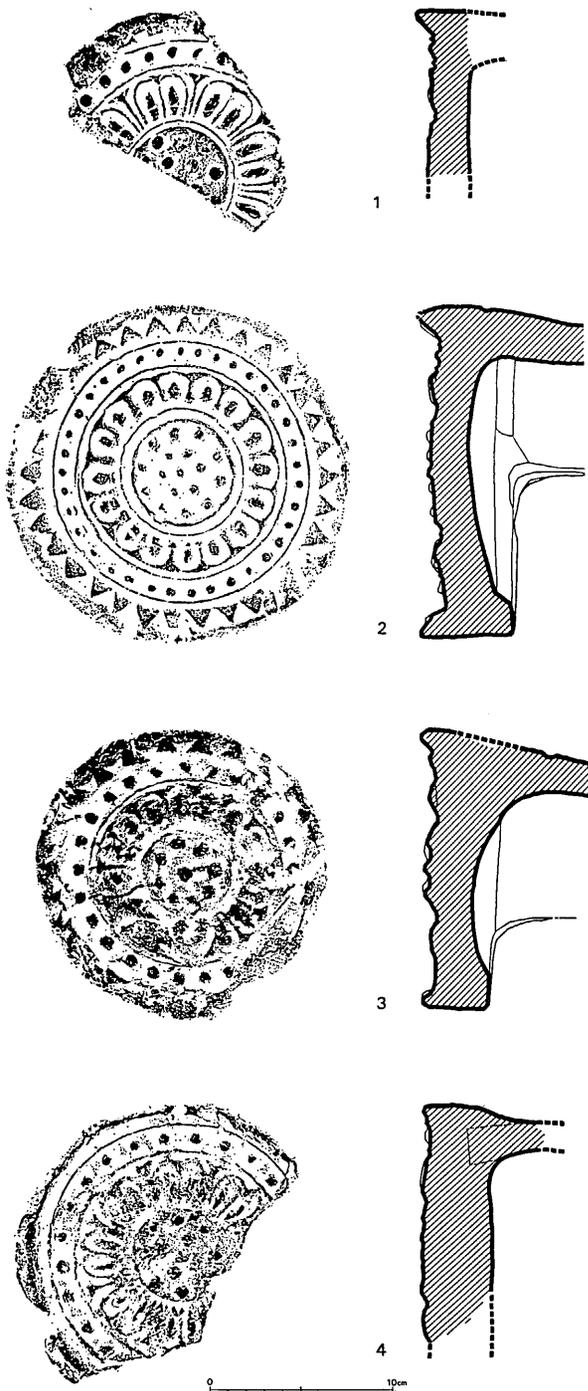
文字瓦（第15図）

採集されたもので、出土地は定かでない。陰刻の斜格子目の間に文字があり、正字の「平井」銘と判読できる。大宰府跡、筑前国分寺などから発見されている。

丸・平瓦（第15図）

丸・平瓦は主にAトレンチの茶色土（瓦層）とSB 001基壇西側の淡茶色土から出土した。

丸瓦は玉縁を有するものが大部分で、暗灰色、灰白色をしており、焼成は軟質なものが多し。完形で出土したものはない。凸面は縄の叩きで、縦方向のケズリによって削られている。円筒形を2分割したものである。平瓦も丸瓦同様暗灰色・灰白色ないし黒色のものが多く、軟質と硬質に焼成されたものがある。側縁はヘラで切り込みを入れ分割したものと、整形したものがある。凸面の叩きは第15図に示したとおりで、縄目の叩き4種、格子目の叩き10種に分類できる。



第10図 軒丸瓦拓影・実測図 (I)

1 複弁八弁蓮華文

瓦当復原径 17.2cm、厚さ 2.4cm、内区中房径 5.6cm、蓮子 1 + 5 + 10、弁区幅 3.0cm、外区内縁幅 1.3cm、珠文 32、凸鋸齒文 32、黒灰色、胎土に砂を含む、焼成は硬質、伝般若寺出土。(観世音寺蔵)

2 複弁八弁蓮華文

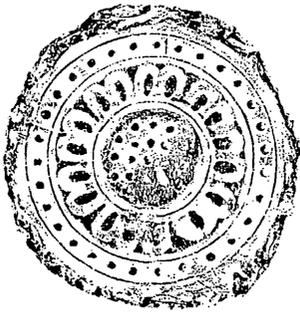
瓦当径 18.0cm、厚さ 2.3cm、内区中房径 5.8cm、蓮子 1 + 6 + 10、弁区幅 2.4cm、外区内縁幅 1.2cm、珠文 36、凸鋸齒文 33、灰色、砂を含む、焼成は硬質、瓦窯附近出土。(森岡氏蔵)

3 単弁一六弁蓮華文

瓦当径 15.4cm、厚さ 2.9cm、内区中房径 4.8cm、蓮子 1 + 8、弁区幅 2.5cm、外区内縁幅 1.2cm、珠文 26、凸鋸齒文 24、黒色、胎土には砂が少い、焼成は軟質、瓦窯附近出土。(森岡氏蔵)

4 複弁八弁蓮華文

瓦当復原径 16.5cm、厚さ 4.0cm、内区中房径 5.0cm、蓮子 1 + 4 + 8、弁区幅 3.1cm、外区内縁幅 1.5cm、珠文 32、外縁は素文、灰色、胎土に砂粒が多い、軟質、伝般若寺出土。(観世音寺蔵)



5



5 複弁八弁蓮華文

瓦当径16.5cm、内区中房径5.5cm、蓮子1+8+13、弁区幅2.5cm、外区内縁幅1.2cm、珠文30、外縁は素文、黄灰色、胎土に砂粒を若干含む焼成は硬質、SB 001 基壇西の淡茶土層出土。



6



6 複弁蓮華文

瓦当復原径19.5cm、弁区幅3.1cm、外区内縁幅1.1cm、外縁は幅広い素文、黒色、胎土には細砂を若干含む、焼成は軟質である。



7

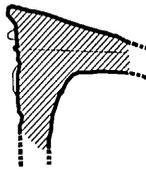


7 細単弁二一弁蓮華文

瓦当復原径17.1cm、厚さ2.7cm、内区中房径4.5cm、蓮子1+6、弁区幅3.0cm、外区内縁幅1.5cm、珠文21、外縁は素文、灰色、胎土に砂粒含む、焼成は軟質。(森岡氏蔵)



8

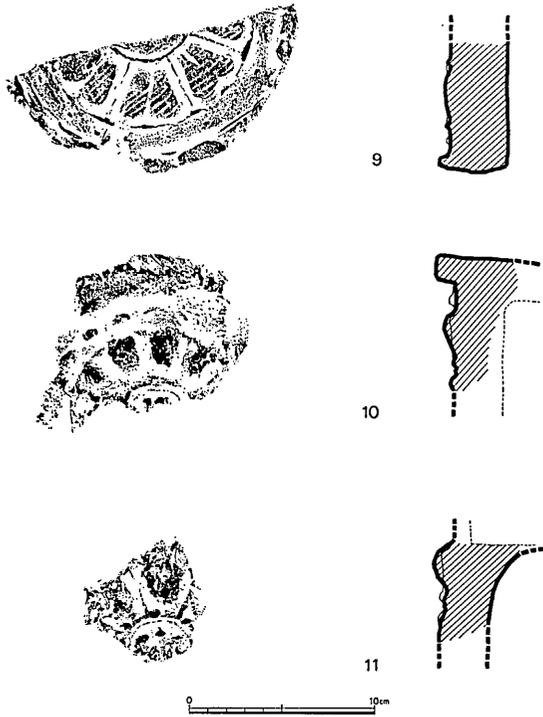


8 細単弁一四弁蓮華文

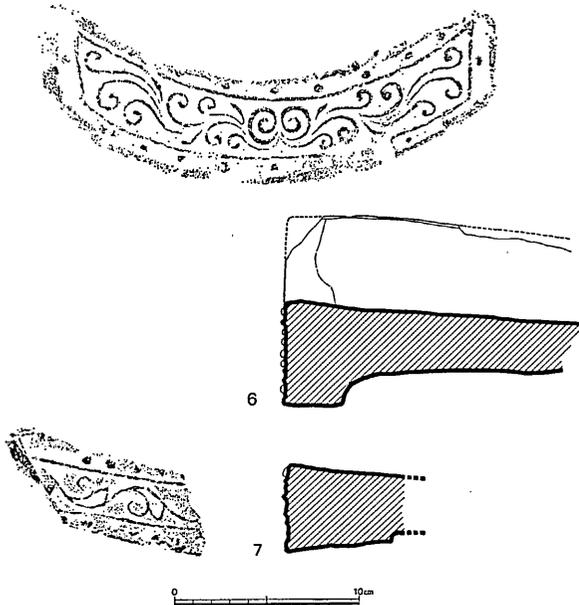
瓦当復原径18.5cm、厚さ2.2cm、内区中房径4.7cm、蓮子1+6、弁区幅3.5cm、外区内縁幅1.6cm、珠文25、外縁は素文、暗灰色、胎土に砂粒を若干含む、焼成は硬質。(森岡氏蔵)



第12図 軒丸瓦拓影・実測図(Ⅱ)



第12図 軒丸瓦拓影・実測図(Ⅲ)



第13図 軒平瓦拓影・実測図(Ⅰ)

9 複弁七弁蓮華文

瓦当復原径16.4cm、厚さ3.3cm、内区中房復原径4.2cm、弁区幅3.7cm、外区内縁幅1.5cm、外縁は素文、暗灰色、胎土には砂粒を若干含む、焼成は硬質、伝般若寺出土。(観世音寺蔵)

10 単弁蓮華文

瓦当復原径17.0cm、弁区幅2.6cm、外区内縁幅1.4cm、珠文、外縁幅1.5cmの素文、暗灰色、胎土に砂粒を多く含む、焼成は軟質。

11 単弁蓮華文

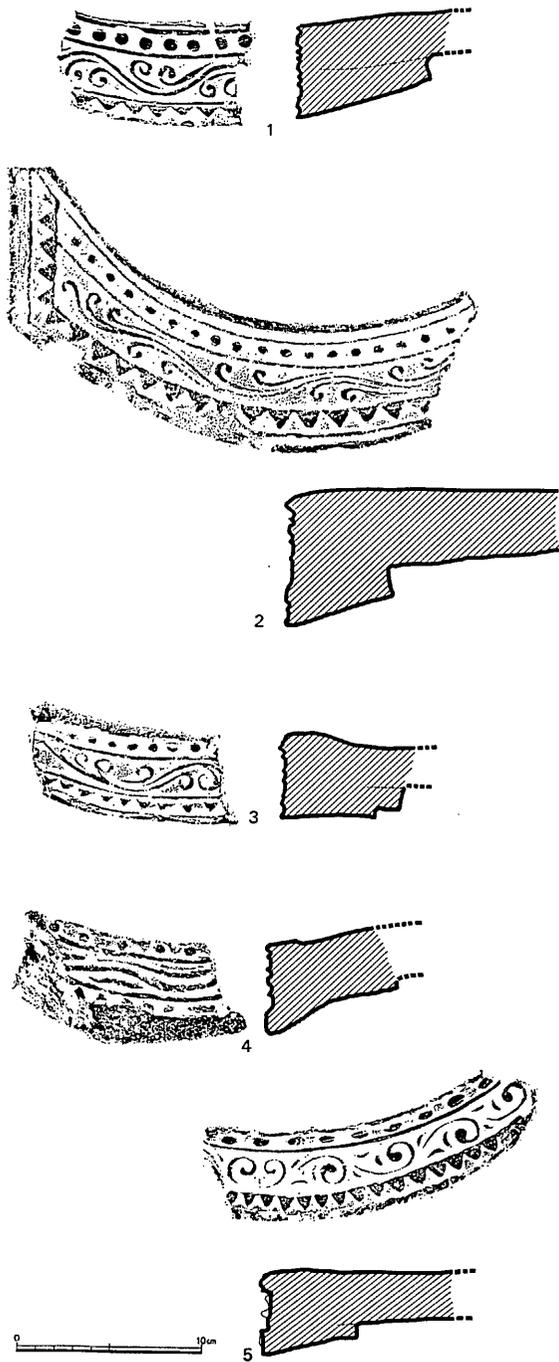
小片であるため明らかでない。暗灰色をしており、胎土には砂粒が若干含まれる。焼成は軟質である。

6 均正唐草文

瓦当厚5.7cm、上弦幅24.5cm、下弦幅24.5cm、弧深4.5cm、曲線顎、上外区珠文10、下外区珠文10、脇区珠文2、灰白色、胎土良質、瓦窯附近出土。(森岡氏蔵)

7 扁行唐草文

瓦当厚4.9cm、上・下外区珠文、段顎、灰白色、胎土に砂粒が多い、焼成は軟質。(森岡氏蔵)



第14図 軒平瓦拓影・実測図(Ⅱ)

1 扁行唐草文

瓦当厚5.2cm、上外区珠文23、下外区凸鋸齒文23、段顎、暗灰色、胎土には砂粒を若干含む、焼成は硬質、SB001基壇西側出土。

2 扁行唐草文

瓦当厚7.0cm、上外区珠文25、下外区凸鋸齒文23、脇区凸鋸齒文4、段顎、灰白色、胎土に砂粒を含む、焼成は軟質。

3 扁行唐草文

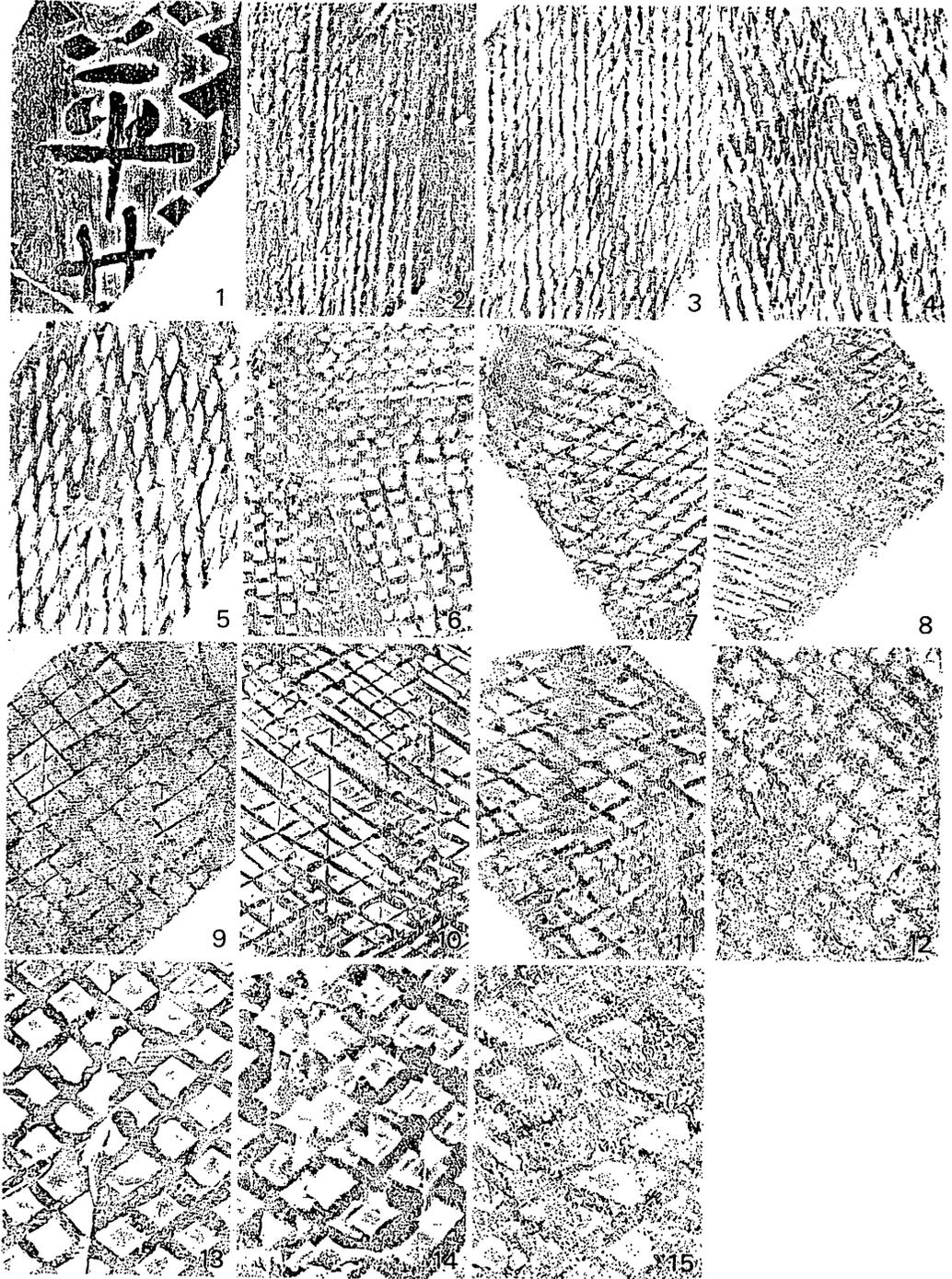
瓦当厚4.7cm、上外区珠文、下外区下向凸鋸齒文、段顎、顎は縦方向の縄目文およびへら削り、暗灰色、胎土良質。

4 扁行唐草文

瓦当厚5.1cm、上外区珠文、下外区上向凸鋸齒文、浅い段顎、顎は横方向の縄目の叩き、灰色、胎土砂粒が多い、焼成は硬質。(森岡氏蔵)

5 均正唐草文

瓦当厚4.5cm、上外区珠文、下外区下向凸鋸齒文、段顎、凸面はへら削りおよびナデ、黒色、胎土良質、焼成はやや軟質、SB 001 基壇西側出土。



第 15 图 丸・平瓦拓影

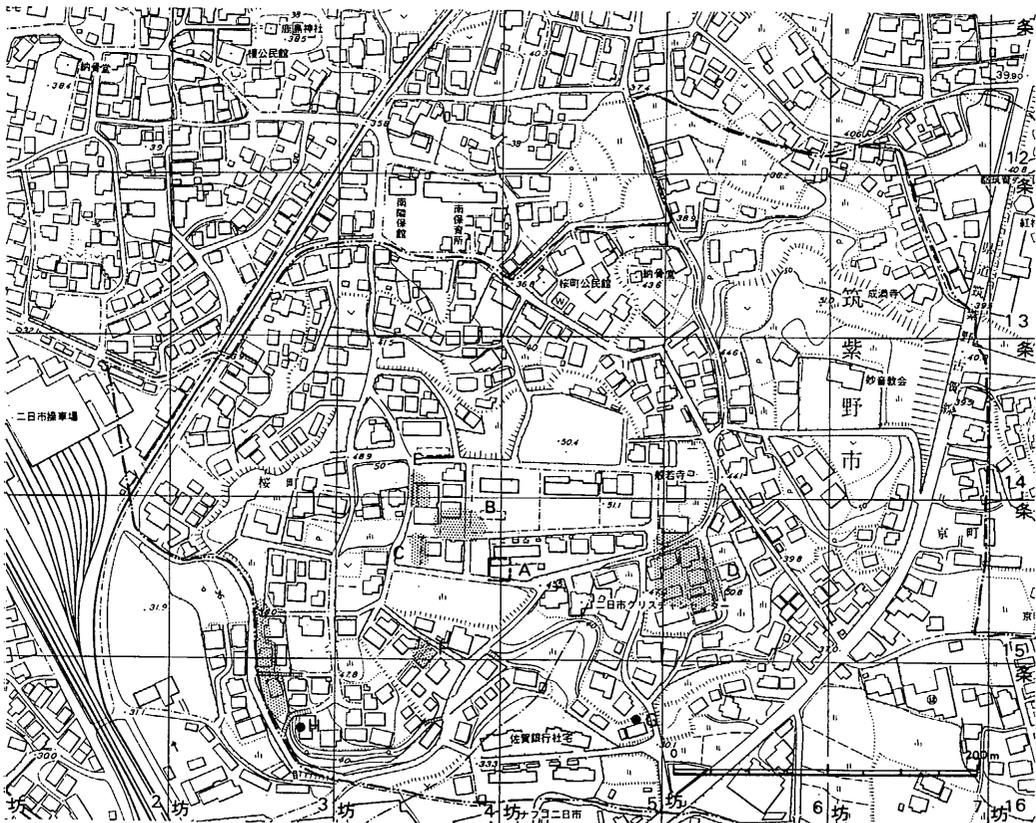
VI 般若寺をめぐる諸問題

(1) 調査の成果

般若寺の旧跡は福岡県筑紫郡太宰府町大字南字般若寺に所在する。その般若寺の字名は隣接する筑紫野市大字二日市にもみられ、両者を合わせると南北4町、東西8町におよび、その主要部分をとっても3町×4町の広さとなり、おそらく寺域を越えて広範なひろがりを見せる。

調査の結果、般若寺塔跡の瓦積み基壇の一部を検出することができた。出土遺物からみて7世紀末～8世紀初頭以降に存在したこの塔跡の遺構は、般若寺の伽藍に関してまったく手懸りを把握していなかった現状からすれば、重要な成果とすることができる。

第16図は地元般若寺在住の森岡兼雄氏からの聞き書きを中心に幾人かの方々の御教示から作



- A. 塔跡 B. 土壇跡 C・F. 礎石出土地点
D・E. カネツキ G・H・I. 瓦窯

第16図 般若寺跡周辺の遺構分布図

成した般若寺周辺のかつての遺構分布図である。森岡氏によれば今回検出した塔跡Aの西北に土壇Bが存在していたという。この証言は九州歴史資料館渡辺正気氏や北九州市立歴史博物館小田富士雄氏からも得ており、さらに小田氏が昭和33年に撮影された旧景写真（図版2）によって確認される場所である。塔心礎の現在の位置は宅地造成前のそれからさほど移動してはおらず、土壇Bは塔とは別の建物と考えられる。Aトレンチの茶灰土層に多量の瓦が含まれていたが、地形の傾斜および遺物の流れからみてこのトレンチの北に瓦葺の建物の存在を想定しようといえる。土壇Bの旧所在推定地はまだ発掘調査が可能であり、遺構基底部の遺存も見込まれ今後を期待しよう。

C地点からはかつて大石が出土しており、現在森岡氏宅に移されている。大石の下には凹穴が掘られ、その中に小石が詰められていたということから、礎石およびその掘方・根石であろう。約1.1m×0.7～1.0mほどの大きさの花崗岩の表面を平坦に加工している（図版11-上）。これが礎石であれば土壇Bの西側に一棟の礎石建物の存在を推定しよう。

D地点にはホノケに「カネツキ」の名称が残されており、かつて鬼瓦が出たらしい。なおE地点にも「カネツキ」のホノケがあったという説もある。

F地点ではやはり礎石が出土しており、森岡氏宅に移されている。約0.85m×0.65mの方形の花崗岩で約0.4mの厚さをはかる。上面を平坦に加工し、その中央に直径22cm、深さ14cmの凹穴を不整形に穿っている（図版11-下）。なおこの地点とA～C地点とは約4mの段差が生じている。

G・H地点には各1基、I地点には3基以上の瓦窯が所在していたといわれ、般若寺瓦窯と称せられることもあるが、その実態は明らかでない。

以上のように調査の成果と聞き込みの結果によって、般若寺は今調査地点およびその西側部分を伽藍の中核地域としていることが推察される。さらにその推察が正確なものであれば、般若寺は法起寺式の伽藍配置をとる可能性が考慮されるのである。それらが大宰府条坊との関連でとらえれば、塔が左郭4坊の線上にのること、南門の可能性を考へるF地点がほぼ15条の線上に位置すること、丘陵上の平坦地（現状は宅地造成後であり旧状とは多少異なるが）が主に14条4・5坊に広がること、などからみて左郭14条4坊に伽藍の中心部を置き、それよりも多少広い、すなわち1町四方以上の寺域を想定しよう。

（2）般若寺跡出土の瓦

今回の調査で出土した軒瓦はわずかに限られていたものであるが、これまでの採集品を般若寺跡出土品に含めて整理すると、軒丸瓦11種、軒平瓦7種に分類できる。従来、般若寺跡発見の瓦類は中山平次郎^(註16)、関野貞^(註17)などによって紹介されており、特に中山平次郎「古瓦類雑考」の記載は詳しい。瓦類には軒丸瓦7種・軒平瓦4種があげられている。ここではこれらの資料を

ふまえ、一応文様構成の面から2、3の問題点を整理してみたい。^(註18)

まずセット関係についてであるが、軒丸瓦1と軒平瓦1は老司I式と呼ばれているもので、すでに観世音寺・老司瓦窯等の出土例から組合せが明らかになっており、時期的には7世紀末頃におかれている。又、軒丸瓦4と軒平瓦5は鴻臚館系の瓦で、大宰府跡の出土例からセット関係が考えられており、8世紀初頭頃の年代を推定されている。この両型式の瓦類は九州一円に広く分布しており、^(註19)現在ではそれらの年代は不動に近い。特に老司I式は本跡出土の瓦類のなかでは最も古い時期のものである。軒丸瓦2・3については同系の文様構成をもつ軒丸瓦が大宰府蔵司跡、杉塚廃寺などから発見されており、3については三宅廃寺からも出土している。これらの軒丸瓦と共伴して軒平瓦2も発見されており、組合せを考える上での良好な出土例である。又、3は豊前国分寺、豊前国府に類似した軒丸瓦が出土しており、それらを考える参考資料である。

次に軒平瓦6は森岡氏の採集品である。現在九州においては大宰府史跡第64次調査で類例を追加することができ、2点を数える。この両者はC字形の中心飾から左右に派生する蔓草の流れ、法量等は共に相等しく同範の可能性が高い。又、製作技法の点も極めて類似している。この他平安宮朝堂院、西賀茂瓦窯等から同系と思われる瓦が出土しており興味深い。それらを比較すると、中心飾は本例が平安宮のそれに比べ、内側に半転長く巻き込んでおり、蔓草は平安宮のものはシャープな流れで長いのに対し本例は蔓草が短く、接続していない。又、瓦当の下弦も27cmに対し、24.5cmとかなりのひらきがみられ小形化している。しかし文様構成は極めて類似している。このようなことから本例は平安宮のものに比べやや退化した傾向がみられる。西賀茂瓦窯出土のNS 209型式は本例に最も類似しており、瓦窯の存続年代と瓦の変遷等から9世紀中頃の年代が考えられている。^(註20)したがって軒平瓦6には上記の理由などからNS 209型式とほぼ変らない時期をあたえることができよう。

以上、発掘調査の出土瓦と採集瓦とを通じて般若寺瓦の組合せ、類例等について記してきた。これらの出土・採集瓦からみて般若寺の創建は7世紀末頃までさかのぼらせうる可能性が生じてきており、また軒平瓦6を補修等に使用したものとみなせば9世紀中頃は依然として活動していたと考えられるのである。

(3) 「上宮聖徳法王帝説」裏書にみえる般若寺との関係

般若寺の名は「上宮聖徳法王帝説」裏書に^(註21)

曾我日向子臣、字無耶志臣、難波長柄豊碕宮御宇天皇之世、任筑紫大宰帥也、

甲寅年十月癸卯朔壬子、為天皇不念、起般若寺云々、□□京時定額寺云々

とみえる。ここには筑紫大宰帥蘇我臣日向が「甲寅年」すなわち白雉5年(654)に孝徳天皇の冥福を祈って般若寺を建立し、奈良時代にいたって定額寺となったことが記されている。こ

の般若寺の所在地は江戸時代以来久しく奈良市所在の般若寺と考えられてきた。ところが昭和8年にいたり福山敏男・田中重久両氏が相次いで筑前般若寺説を提唱された。^(註22)それは奈良般若寺の創建が天平年中をさかのぼりえないことと、裏書きの記録からみて筑紫大宰帥の創建した寺は当然大宰府付近に求められるべきこと、そして府郭の中に般若寺の字名とともに塔心礎が現存すること、などがその理由となっている。なお福山氏は蘇我臣身刺(日向)と武蔵寺との普通から、塔原廃寺の存在にも注意をはらわれている。

しかし筑前般若寺説もまた出土古瓦からみて奈良時代をさかのぼりえないと考えられていた。この問題に解決を示す新たな見解をうちだしたのは小田富士雄氏である。^(註23)小田氏はまず裏書の記事が記録の体裁上連続して書かれていることから般若寺九州説を文献的に正しいと判断される。ついで白雉5年(654)、すなわち7世紀中頃に、大宰府周辺でその存在を考える寺の中で、畿内に類例をもつ三段割り込み式の塔心礎を残し、蘇我臣日向の異母兄蘇我倉山石川麿呂の建立した大和山田寺の瓦当文の系統に属する軒先瓦を出土する塔原廃寺に着目された。こうして小田氏は裏書の般若寺を塔原廃寺に比定される。次にこの塔原廃寺が条坊郭外に位置するところから、飛鳥寺と元興寺、本薬師寺と薬師寺との関係に例をとられ、大宰府条坊制の整備後郭内に移建され現在の地に般若寺が成立したと解された。そして移建後の両寺の関係を元般若寺としてとらえ、元般若寺の後身を蘇我臣日向(身刺)に通じる「ムサン寺」＝武蔵寺と推考されている。この小田氏の塔原廃寺般若寺移建説は裏書を遺構・遺物に即して解釈されたもので、大宰府般若寺の創建が奈良時代をさかのぼりえないとしても裏書の般若寺と一致しうることを論理的に論証されており、今日では異論を聞かない。

ところで今回の調査結果からみて、遺構・遺物の上から般若寺と塔原廃寺を結びつける手懸りをうることはできなかった。むしろことに出土・収集の瓦を比較すると般若寺と塔原廃寺との間には明らかな断絶がある。ことに今日では老司I式瓦は奈良時代をさかのぼらせて考えられており、一時的にしろ両寺は併存する可能性も生じているのである。さらに大宰府条坊制整備後の郭内移転を考える場合、勿論塔原廃寺が郭外に位置することが絶対的な前提となる。鏡山猛氏によれば、大宰府の条坊制は東西各12坊を限り、観世音寺文書によって南北に22条までを確認することができる。^(註24)しかしそれは南北22条を意味するのではなく、あくまで文書によって22条までを知りうるということであり、何条までおよぶかは今後の研究に委ねられている。その大宰府の条坊制は京師のそれとは相違して条里制をそのまま転用している。とすれば条里の1条が条坊の6町に相当し、東西が計24坊であることから、24条を限りとする可能性は残されている。したがって塔原廃寺は右郭23条9坊付近の郭内に位置することになる。次に22条を限り郭外であった場合にも第II章で北辺の諸寺をみてきたように、観世音寺を例外として北辺では国分寺のような主要寺院を含めて既知のすべての寺が郭外に位置している(第2図)。これは寺院を郭内に建立することに必然性のないことを示しており、したがって654年に創建さ

れたばかりの寺を早々に郭内へと移転するほどの痛切な必要性はなかったであろうと判断される。こうして塔原廃寺般若寺移転説はきわめて示唆に富んだ有力な見解であったけれども、今後は塔原廃寺般若寺別寺説を検討していく必要がある。

(4) ま と め

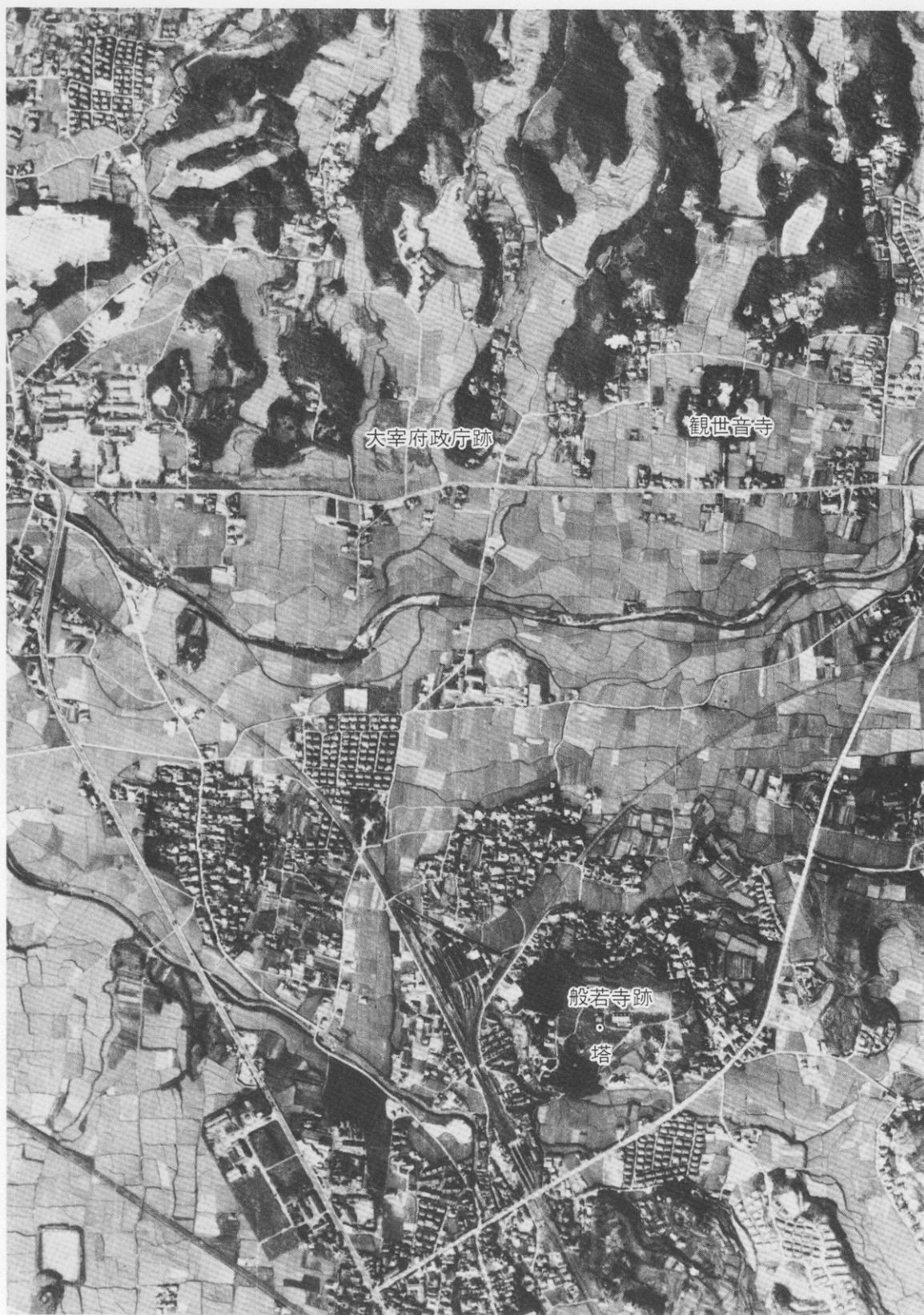
今回の調査では般若寺塔跡基壇の一部を検出したにとどまったが、聞き込みなどによってその伽藍の位置・配置などに一定の見通しをえた。現地はすでに宅地造成され、また住宅街化しているがなお発掘調査の余地はあり、今後を期待を残したい。

塔跡基壇外出土の土器は8世紀中頃に属する例を主体としており、Aトレンチでは平安時代前半に降るものもみられた。さらに出土・採集の瓦は7世紀末～9世紀中頃に属している。また実見していないが、かつて「天元」年(978～983)銘瓦が出土しており、所在地は明らかでないが般若寺経塚から永長3年(＝承徳2年、1098)・保安3年(1122)銘の経筒の出土を伝える。^(註25)したがって般若寺の創建は7世紀末～8世紀初頭に考えられ、平安時代へと活動を続けていったのであろう。

般若寺の動向を示す記録は残されていないが、その所在地名をとってこれまで般若寺と称されてきており、本報告でもそれを踏襲した。しかし前述したようにそれを「上宮聖徳法王帝説」裏書の般若寺とみなすには多くの躊躇があり、今後解明すべき発掘調査の課題としておきたい。

- 註1 竹内理三「筑前国観世音寺史」(南都仏教2) 1955
小田富士雄「筑前観世音寺古代史」(史学論叢2) 1967
- 註2 鏡山猛「筑前国分寺」(『国分寺の研究』下) 1938
- 註3 小田富士雄「古代に於ける筑前竈門山寺の活動」(史迹と美術31—10) 1961
- 註4 小田富士雄「古代の大宰府四王院」(『九州史研究』) 1968
- 註5 藤井功・亀井明德『西都大宰府』 1977
- 註6 小田富士雄「筑前安楽寺史」(九州史学12) 1969
- 註7 観世音寺以外に長元8年(1035)観世音寺文書に名を残す東林寺、『統本朝往生伝』康和4年(1102)にみえる極楽寺は残存地名・古絵図などから郭内の所在が考えられ、まったく所在しないということではない。
- 註8 天満宮安楽寺草創日記
- 註9 小田富士雄編『塔原廃寺』(福岡県文化財調査報告書35) 1967
- 註10 石松好雄・山村淳彦『杉塚廃寺』(筑紫野市文化財調査報告書4) 1980
- 註11 石田茂作『飛鳥時代寺院址の研究』 1936
- 註12 註1・3・4・6・9の小田富士雄氏の諸論考は同氏著『九州考古学研究—歴史時代編一』1977に関連諸論考とともに所収されている。
- 註13 石田茂作「塔の中心礎石の研究」(考古学雑誌22—2・3) 1932(『伽藍論攷』『仏教考古学論攷』四所収)
- 註14 森田勉・高橋章『筑前国分寺—昭和51年度発掘調査概報一』 1977
- 註15 中山平次郎「古瓦類雑考(八)」(考古学雑誌7—2) 1916 の般若寺趾跡瓦拓影1.
- 註16 中山平次郎「古瓦類雑考(八)」(考古学雑誌7—2) 1916
- 註17 関野貞「瓦」(『考古学講座』) 1930
- 註18 採集資料として観世音寺、森岡兼雄、島津義磨氏所蔵品を使用させていただいた。
- 註19 九州歴史資料館『大宰府展』 1978
- 註20 近藤喬一編『西賀茂瓦窯跡』(平安京跡研究調査報告4) 1978
- 註21 竹内理三編『寧楽遺文』下、文学編人々伝
- 註22 福山敏男「般若寺の創立に関する疑問」(歴史地理62—5) 1933
田中重久「般若寺草創攷」(歴史地理62—6) 1933
- 註23 小田富士雄編『塔原廃寺』(福岡県文化財調査報告書35) 1967
- 註24 鏡山猛「大宰府の遺跡と条坊」(史淵16・17) 1936・37(『九州考古学論攷』所収)
- 註25 竹内理三編『平安遺文』金石文編71
- 註26 竹内理三編『平安遺文』金石文編153・補遺9.

圖 版



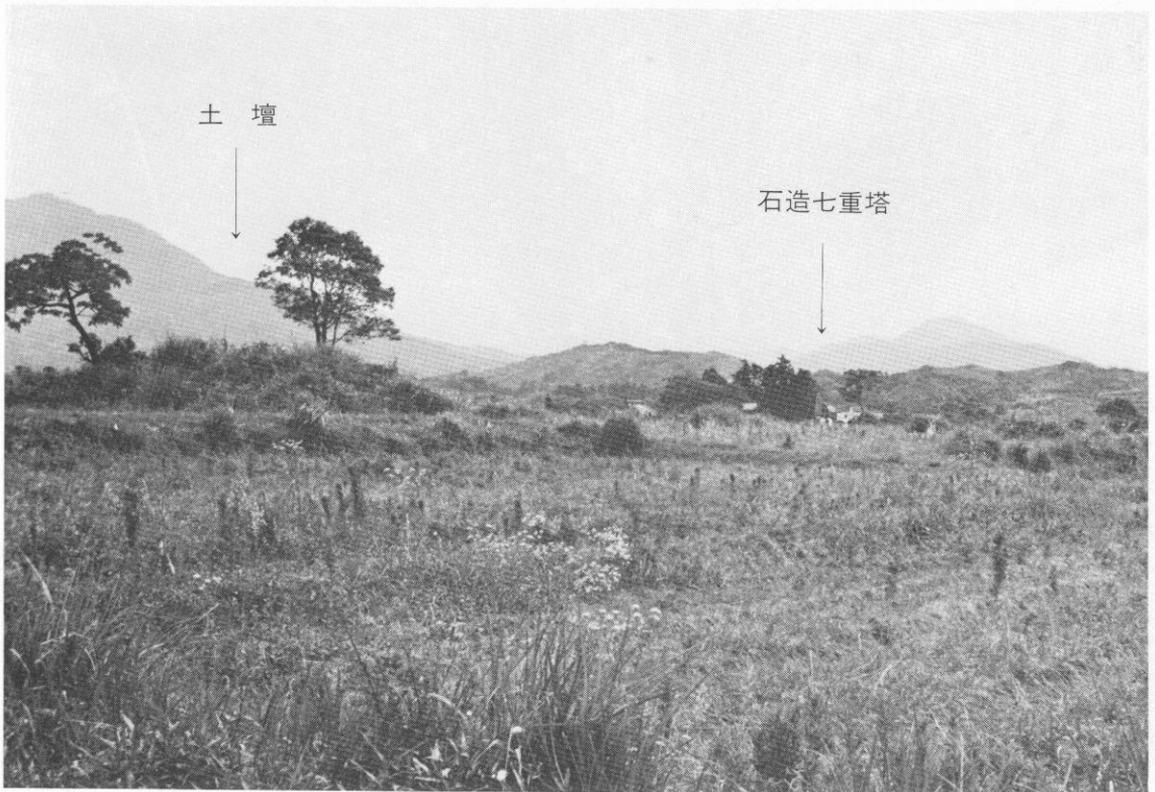
般若寺跡周辺航空写真

大宰府政庁跡、観世音寺、般若寺跡、塔



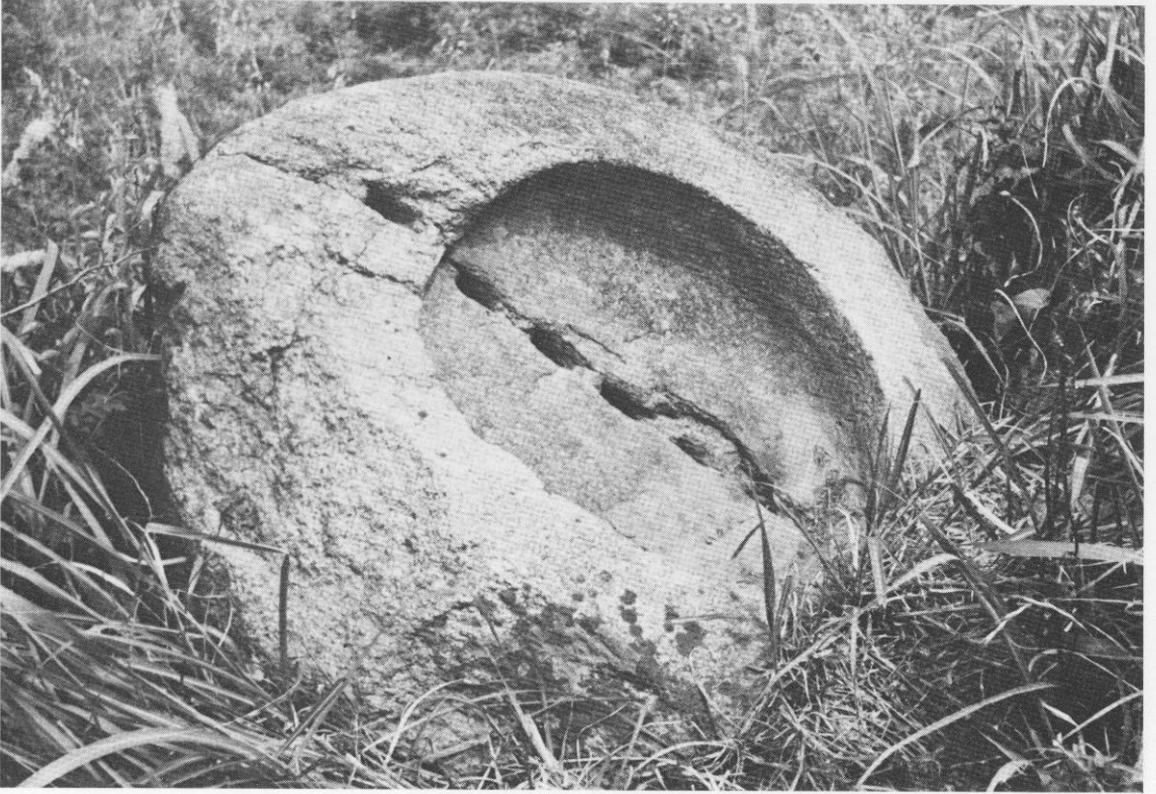
般若寺塔跡周辺近景（東南から）

昭和33年小田富士雄氏撮影



般若寺跡塔周辺近景（南から）

同上



塔心礎旧状

昭和33年小田富士雄氏撮影



塔心礎現状（北東から）



調査地点の現状（西南から）



同 上（西北から）

Aトレンチ (北から)



Dトレンチ (西から)





SB 001 瓦積み基壇と
基壇外の遺物出土状態（北から）



同 上（南から）



瓦積み基壇外の遺物出土状態（西から）



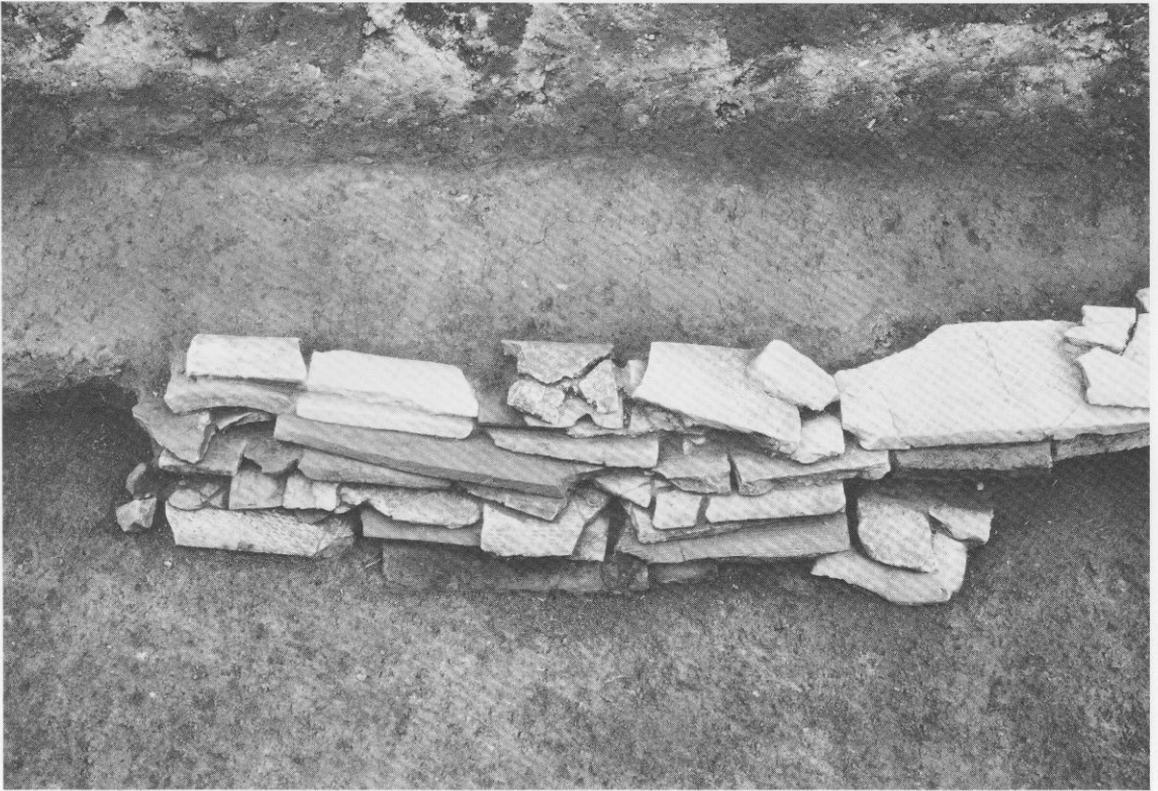
軒先瓦の出土状態



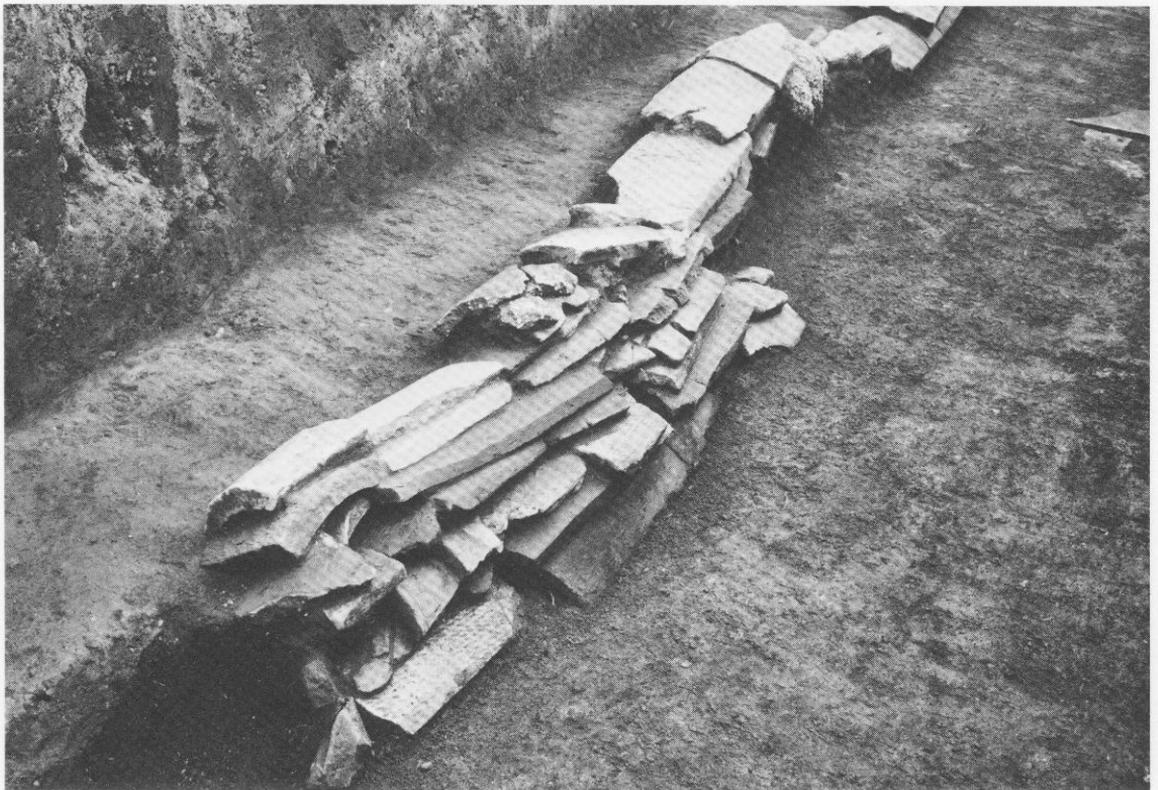
SB 001 瓦積み基壇西北隅の状態



SB 001 瓦積み基壇近景
(西北から)



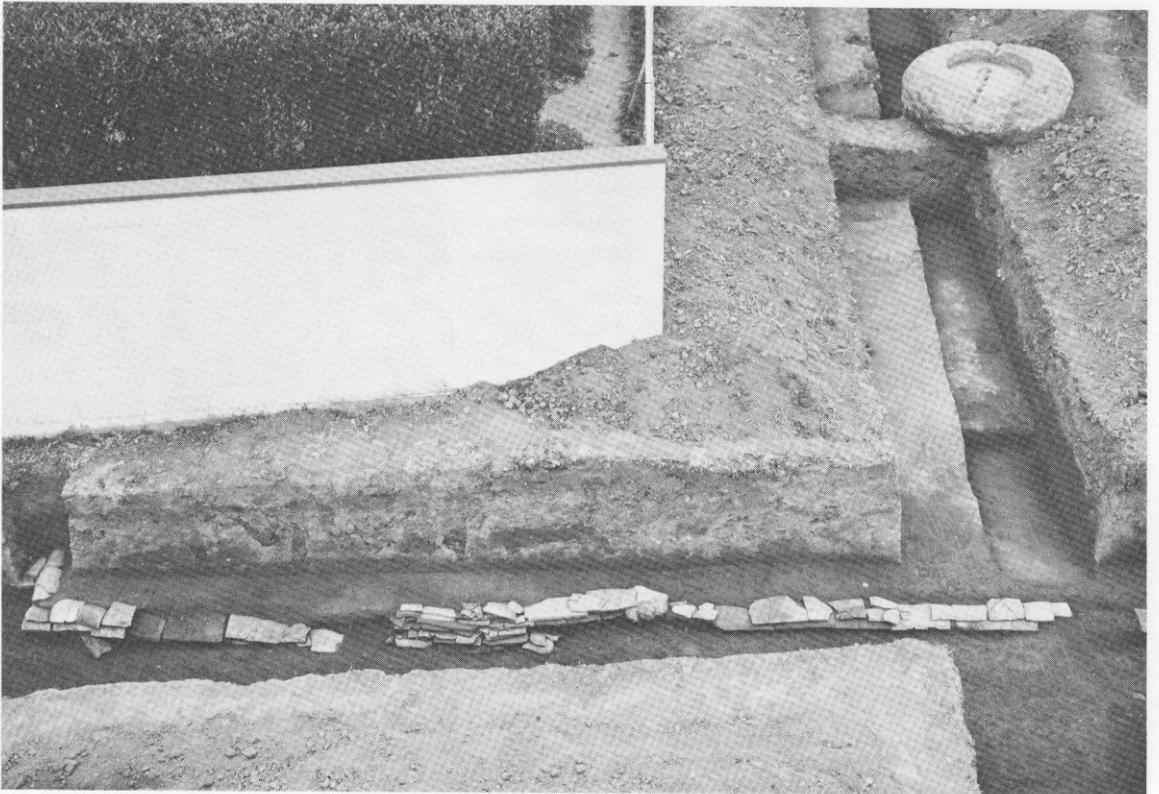
SB 001 基壇化粧の状態（西から）



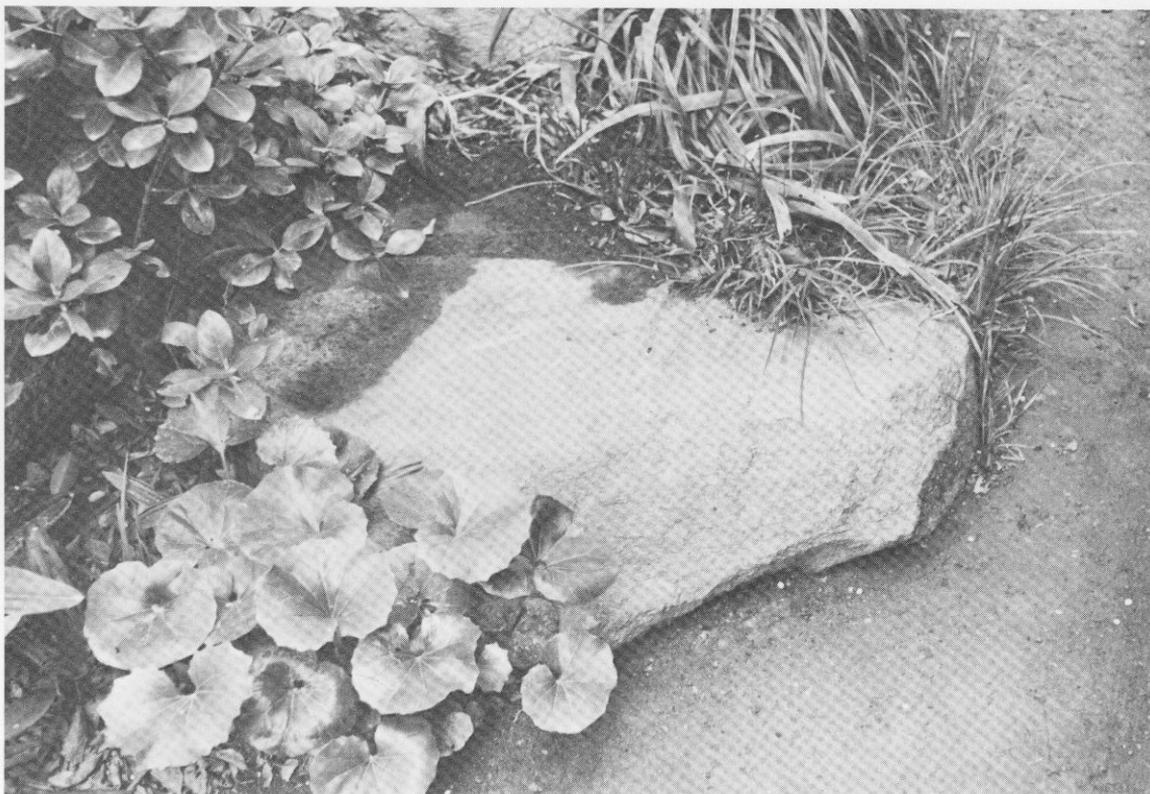
同 上（西北から）



SB 001 の基壇と塔心礎（北から）



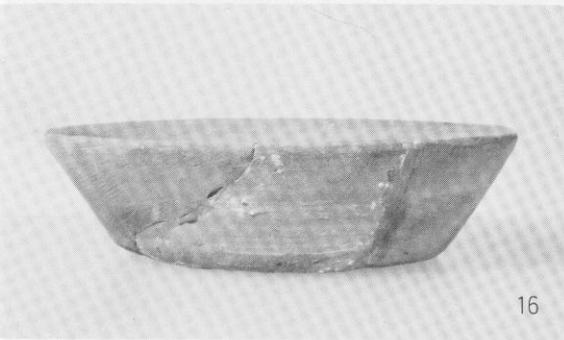
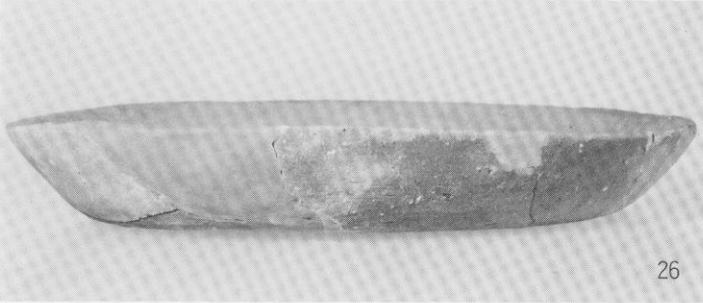
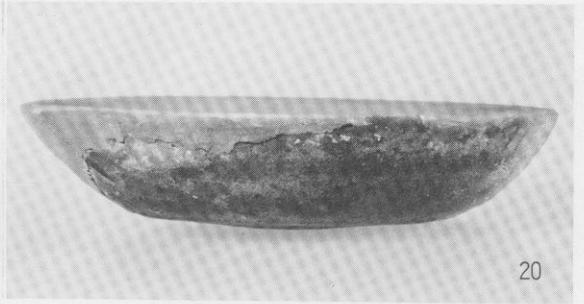
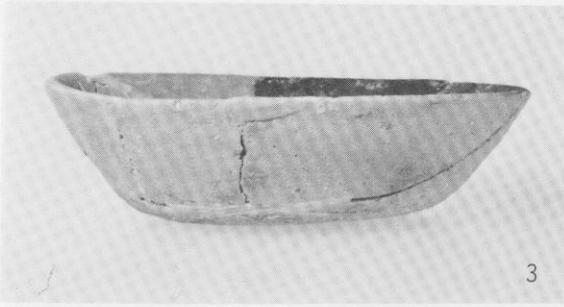
同 上（西から）

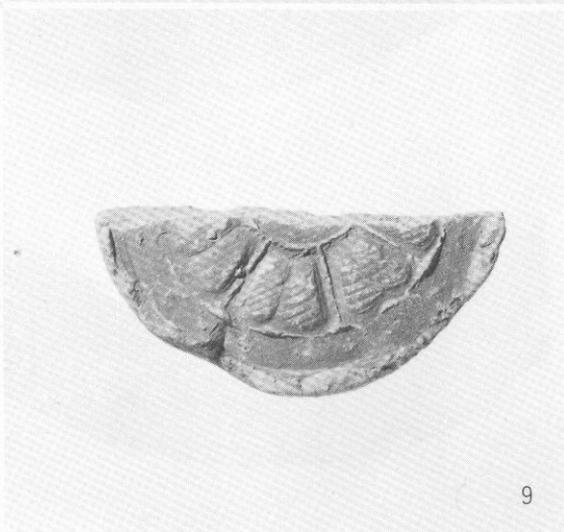
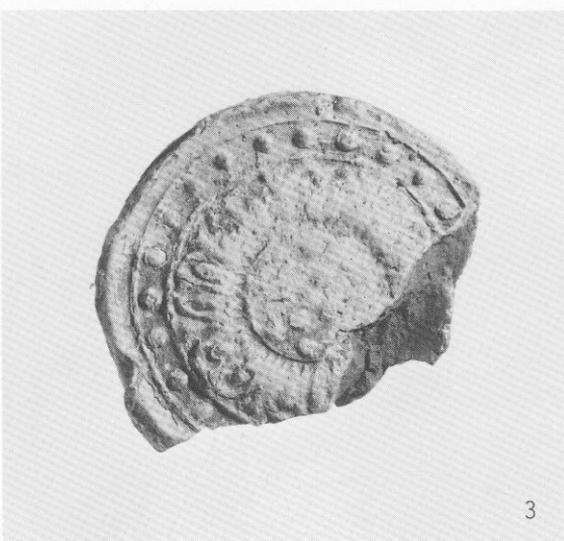


C 地点出土の礎石

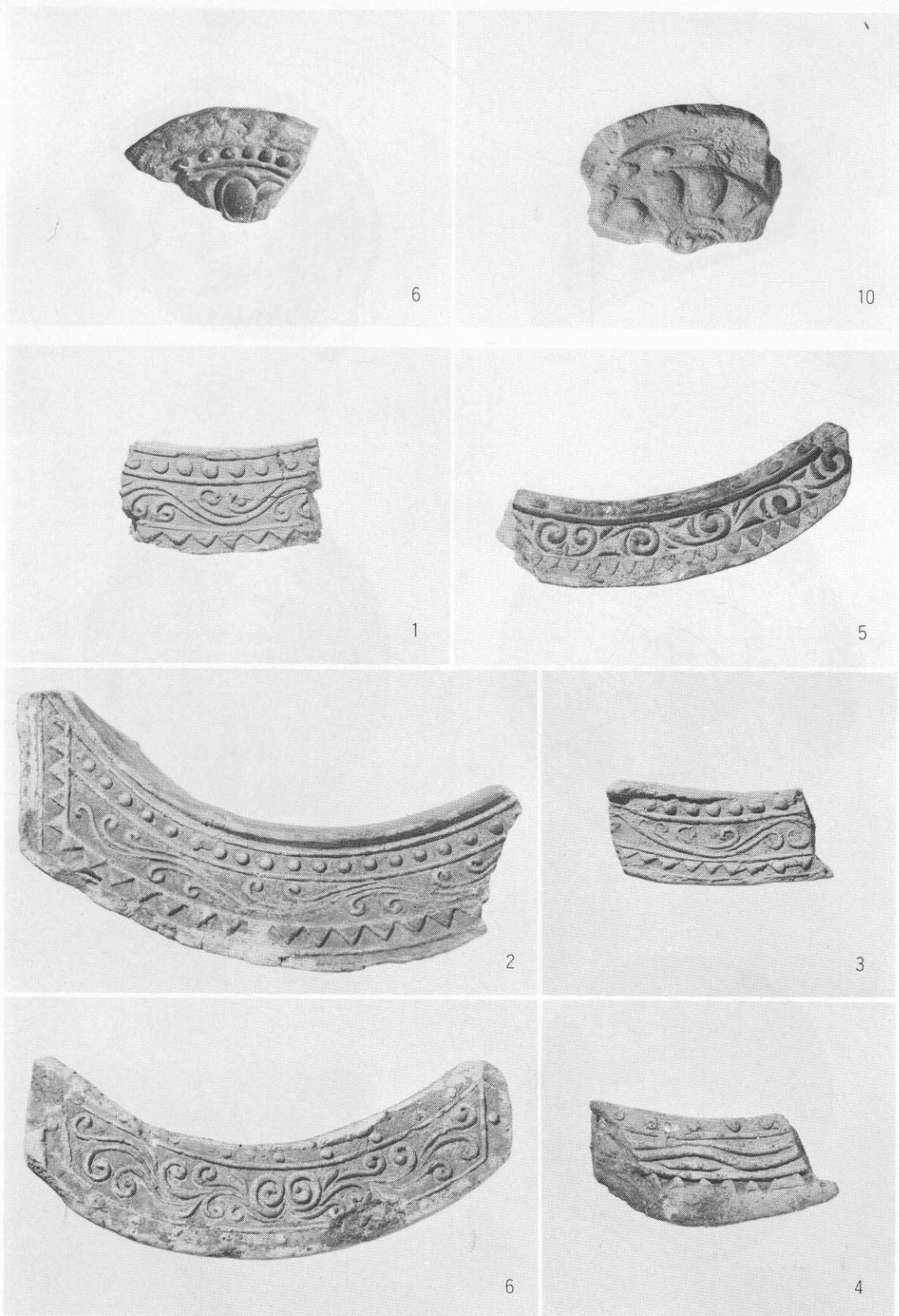


F 地点出土の礎石





般若寺跡出土軒丸瓦 (1/3大)



般若寺跡出土軒丸・軒平瓦 (1/3大)

般 若 寺 跡

大宰府史跡昭和54年度発掘調査概報別冊

昭 和 55 年 3 月

発 行 九 州 歴 史 資 料 館
福岡県筑紫郡太宰府町大字大宰府字太郎左近1025

印 刷 正 光 印 刷 株 式 会 社
福岡市中央区赤坂1丁目2の21